
戦場に華が舞い散るとき

佑川芭瑠堵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

戦場に華が舞い散るとき

【Nコード】

N5041G

【作者名】

佑川芭瑠堵

【あらすじ】

真田弦一郎は、息子の華弦を連れて母の墓参りに行った。そこで、昔…華弦の母である”華乃”について語り始める。戦国乱世に出会い、共に歩んだ道のりを……。――。

第零話：父、息子に語る（前書き）

この小説は、戦国BASARA（一部命名、テニプリより）を捻じ
って執筆しております。

よって史実とも原作とも異なっておりますので
そのところはご了承ください。

第零話：父、息子に語る

桜が散る春の頃

真田弦一郎は息子の”華弦”かなづなを連れて、母親の墓参りに来ていた。そこは、小高い丘の上にあった。

見晴らしが良く、頭上には大きく澄み渡る青空があった。ぽつんと一つ、桜に寄り添うように立っているお墓。

寂しくないようにと、弦一郎が桜の苗を植えたそうだ。そのお陰で、あの時から数年たった今…まだまだ細いが立派な木に成長を遂げていた。

まさに、弦一郎の息子の華弦の様に…。

「これが…母上のお墓でございますか？」

そう…華弦が弦一郎に訪ねる。

すると、弦一郎は力強く『うむ』と頷く。

「お前の母は、気高く美しい誠の武人だった……」

「は、母上は女性なのに…武人だったのですか！？」

華弦は、今のいままで知らなかった母の身分を聞いて驚きを隠せないようだった。

このご時世。

まさか、女の人が武士だとは誰も思わないだろう。

「そうだ…立派な武人だ。

そこら辺の武士とは格が違う…二刀流の『舞姫』とも呼ばれ、戦女神だと唄われた……」

「父上、今日こそは…母上について教えてください！」

「よかろう…お前も立派な男だ…時期は満ちただろう……なあ？華乃…」

いったん、会話を切って

妻であり、この我が子の母親である”華乃^{はなの}”に手向けて言い放った。

「…この父が言う事、一言たりとも聞き逃すことなど無い様にな？華弦！！」

「はいッ父上！もちろんでございます！！」

こうして、弦一郎は母”華乃”の事を息子に伝えようとした。

あの…戦国乱世の頃を……。

第巻話・出会い、そして正体！（前書き）

実際の歴史とは異なります。

あくまでオリジナルなのでその事をご承知の上でお読みください。

第壱話・出会い、そして正体！

華弦の父、真田弦一郎は…幸村様に仕える武將だった。

「烈火アアアア！！」

「う、うああ…ッ?!」

この通り、二つの槍を使い。

それも一流の腕前で、そこら辺の武將には負けた試しがない。
今日も戦に出向いていたのであった。

……でも、今日はいつもと違った。

何故かというと、戦場で女子おなこを拾ったからである。

丸井文之進という弦一郎の専属忍がそれを弦一郎に報告に来たのが
始まりだった…。

「旦那、報告が…」

「何だ？文之進」

ほとんどの敵兵を倒し、しばし落ち着いた所へ
サッと文之進が近くに寄った。

「はっ……先ほど戦場地に十代半ば位の……女子を拾ったでござるよ
！」

「なぬ！？それは真か？！」

「ええ……おい、連れて来い」

「御意に……」

文之進は忍の長を務めている。
なので、下の者に拾ったと言う女子を運ばせた。

「この女子でござる」

連れてきた女子はぐったりと横たわっていた。
文之進に支えられて、上半身を起こしている状態だ。

「……どうするでござるか？」

「見た所、農民の娘……と言った所だろう？
……保護をしない訳には参らぬ！」

「では、連れて行くでござるか？」

「それしか方法はあるまい……」

「拙者は……あまり賛成出来ぬでござるよ？」

「……もしかしたら、残党かも知れぬ故」

「……他に、何かを娘に見たのか？」

「……いえ、何も」

「そうなら良い。」

「……お前の言葉、真田弦一郎……信じるぞ？」

「……はいっ」

何故、このような場所に女子が倒れていたのか？

弦一郎は不思議に思った。

文之進が、先ほど言葉に詰まった様子だった。

確かに、この戦で残っている者と言えば残党位しか居ないであろう。もしかしたら、忍の類かもしれぬ。

だが、文之進がここで言わぬなら……

某は自分の忍を信じようと思ったのだった。

しかし、真に不思議な点が残ったものだ。

自ら”農民の娘”と仮定して言ったのは良いものの。

それでも不自然には変わりは無かった。

何故かというところ、ここは村も何も無い場所だからだ。

そこへ一人の女子と……何かあると弦一郎は思った。

自分では対処できないと思い、女子を城に連れて帰り

幸村様へ報告をする事にした。

忍の文之進と共に女子を連れて、幸村城へ出向いたのであった。

「……それで、この娘か？
倒れていたというのは？？」

「はっ、左様にございます！」

「ふむ。娘よ、顔を上げて……名を申せ」

「は、はぁ……すみません。名前は……ありません」

女は頭を少し上げ、申し訳なさそうに話す。

その一声は透き通った可憐な声だったが…しっかりとしていた。

「ほう…そうか

困ったねえ…これではお前の事を何と呼べば…

…そうだ、幸村よ！」

何かを思いついたのか？

幸村様は弦一郎を指した。

「何でございましょうか…？」

「この娘に名を与えやれ…！」

「そ、某が…ですか？！」

まさか自分が名をつける事になろうとは……！

予測していなかった弦一郎は、少しこえが上ずってしまった。

「ああ、お前が拾った娘だ。名がないなら与えてやるのが、筋というものだろう??」

「た、確かに…幸村様の言つとおりでございます……そ……そうですな…」

そう言って、言葉を濁す。

あの時、拾われた状況を思い出した。

あの文之進との会話の後。

城に帰る途中に、文之進が言った言葉が横切った。

『……そう言えば、あの娘さあ……』

『なんだ？？』

『いや、ほらっ…戦場にしては華がいっぱい咲いていたでござんす？』

『ああ…特に秋桜がなあ……』

あの絶景を壊してしまったと思うと……胸が痛む』

『へえ、やっぱり旦那もそう思うでござるか？』

拙者も思ったのでござるよ！

それでさ…あの娘を拾ったのってさ

そのお華畑の生き残りなんだよね？』

『残骸？？』

『……そう、生き残り！』

言い方が悪いでござるが…

少しだけ、湖の所に残ってたんでござる

まるで、戦から逃れたようにね…』

『そこで……あの娘を拾ったのか？！』

『うん、そう』

だからさ…誰かがあそこにあの娘を隠したんじゃないかって思うんだ

…あの、戦場から逃れた華の様にね』

確かに沿うかも知れぬ…。

そう、弦一郎は思った。

自分たちの様に、不釣り合いだと感じた者が、こっそりと隠したので

はないだろうか？

「どうだ？弦一郎？？」

「……はい……華の沢山咲いている辺で見つけましたので……
『華乃』……と言うのはどうでしょう？？」

そう、幸村様に申し立てた。

あの戦場場所は……不釣合な位、花が咲き乱れていた。
……それも、ほとんどが踏まれて無残な形になったが……。
あの場所だけは、逃れて生きていた。

「『華乃』か……いい名前ではないか！」

「あ、ありがとうございます！」

「よかつたのう？『華乃』」

「は、はいっ嬉しゅうございます！」

「美しく可憐な華の様で、おまえにぴったりの名だ
弦一郎よ！これも何かの縁……お前の城で世話をしやれ」

「は！^{かしこ}畏まりました、幸村様……」

「ほ、本当によろしいのですか！？」

「ああ、よい。異存はないな？弦一郎？！」

「はい、異存はありません！」

「だそうだ、これで良いだろう？華乃？」

「はい……ご配慮、痛み入ります」

こうして、一郎は華乃を連れて城に帰った。

「ありがとうございます！真田様！」

「い、いや…某はただ…幸村様に従ったまでだ
……礼を言われるほどのことではない」

「いえ！そのようなご謙遜はおよしになってください！！
真田様にはどれだけ…お礼の言葉を述べても足りないくらいです
…！…」

「いやっ…某」

「旦那あ、素直に受け止めたらどうでござるか？そんなに照れなく
ても……」

「うっ…うるさいぞ、文之！！
余計な口出しはするな…」

某は…て、照れてなど……」

「嘘付かなくてもいいのでって！顔が真っ赤でござるよ？」

「……?!」

さすがの弦一郎も…ぐうの音、ひとつ出ないようだ。

「…ふふっ、仲がよろしいですね…?」

そう言っ、て微笑みを浮かべたことは誰も知らない……。

その頃……幸村城では…。

「仁王、只今戻り仕りました…!」

「おお、仁王か。早く報告を致せ!」

「御意!」

幸村様専属の忍仁王が調査を終えて帰還してきたのだった。
もちろん、内容はあの娘の事だ。
密かに調べているあたり、侮りがたいお方なのだ。

「じゃあ、言いますぜえ？あの娘はただ者ではない様子……」

「やはりな…身のこなしが非常に好ましいからなあ……。
それで、続きは？」

「はい!…あの娘は『あつくれもの荒者育成所』の出と言う事で…!」

この仁王が言う『荒者育成所』とは…身寄りの無い子供に、戦闘訓練を施す所だ。

ある者は刀を…ある者は、槍を。

ある者は忍…ある者は、武士に……。

そう言う、未来の人材を育て…世に放つための所なのだ。

そう…華乃もその一人だった。

女子では珍しい…女武士。

「ほう…『荒者育成所』とは驚かされるな…」

それなら、戦に加えれば戦力になろうぞ？」

「そうですねい…」

何せよ、戦場の『舞姫』とまで唱われたのでござるからやり手でしょうね…い？」

『舞姫』とは、華乃のもう一つの名だ。

“荒者”とは…その場所から、その時期一番優秀で、卒業した者だけに与えられる氏だ。

ある者は、華乃を『荒者』と呼ぶ。

ある者は、華乃を戦上の『舞姫』と呼ぶ。

二刀流の刀を扇のように振り翳すことからそう付けられたらしい。

「予測の範疇、文は知っていて黙っているらしい……」。

まったく、幸村様に秘密など…」

「作っても、無いに等しいがな？」

「そうですね…！」

しかし、そのお咎めを為さらないで頂きたいと思う所存何故、一応は私の弟分なので……受けるなら、この私を」

「…構わない

そちを咎めた所で意味は無いからな…

今回は見逃そう」

「ありがとうございます…！」

深々と頭を低く下げて、敬意の意を示す。

さすが、天下を取るのに相応しいのお方だと仁王は思った。
その心持は誰よりも、広く深いものだと思ったのだ…。

「しかし…あの”舞姫”か…：なかなか、良い者を手に入れた…：ふ
ふっ」

「おー怖い。全く、うちの大将は…恐ろしい…：」

「何か言ったかい？仁王」

「いいえ、何も言っていねえでさあー？」

地獄耳並みに良いとは…：今度から発言には気をつけようと思った仁
王だった…。

第貳話：平和な日常（前書き）

史実とは異なります。

それを承知の上でお読みください。

第貳話：平和な日常

華乃を連れた弦一郎と文之進は城に着いた。

そして、華乃の肩身が狭くないように弦一郎のお世話係兼雑用に任命した。

それなのでその役を一任している長。

まず『お紗枝』に話をつけることにした。

「お紗枝、名を『華乃』という幸村様から預かった娘だ。
今日からここに置くことにな」

「旦那が”華乃”と名付けたのでござる！」

「文之進！そこまで言う必要ないっ！！」

「ふふっその事については存じております
…わたくしめにお世話係をとおっしゃるのでしょうか？」

「あ、ああ…そのつもりだ！」

「やれやれ、紗枝さんには敵わないでござるなあ。もう、情報を入
手とは……」

「ふふっ…どれだけ、弦様と居るとお思いですか？もう、それは…
赤子の時から……」

「…そ、某の赤子の頃など…話してもっ」

「あのね、華乃？」

旦那は、この通り…昔もやんちゃで、赤子の時から…」

「だ、黙れ！文い！！」

「はいはい、言われたら恥ずかしいでござるからね？」

「う、うう…」

どうやら、昔は色々仕出かしたらしい弦一郎は黙ってしまっ

それだけ人には言えないほどの事をしてしまったのだろっ

あたふたし始めた弦一郎をよそに、お紗枝は小さい声で華乃に囁いた。

「華乃ちゃんには、あとで教えて差し上げますからね？」

「え…あ、はい！」

ニコツと笑顔になる。

それを見逃さなかった文や弦一郎も一安心した。

こうして華乃は仕事場に出向いた。

皆に紹介されている時はびくびくしがちだったけれど

…それも、一週間経たぬ間に仲良くなっていた。

「華乃ちゃん、これっ弦様によろしくね!」

「はい!」

女中に朝餉を受け取り、運ぼうとしていた。

このように、女中の皆と仲良くしている。

謙虚で可愛げのある華乃は、良く皆に可愛がられた。

そのお陰で華乃もよく笑うようになった。

「弦一郎様…華乃でございます」

「お、待っていたぞ!入れ!」

「はいっ」

そこへ朝餉の支度をして入った華乃。

襖を開けると、そこには文も居た。

「文之進さんもいらして居たのですか!では、もう一人分を……」

「いいって、いいって!」

俺は旦那に報告しに來ただけだし……あーでもなあ」

「どうなされました?やはり、お召し上がりになりますか??」

「いんや、そんなには……でも、小腹は空いているし…華乃ちゃん

が作つたのつて有る？」

「え、えつとあ……小魚の煮物でしたら、昨日お手伝いしたくらいで……」

まだ、自分で作つた範囲ではないので申し訳なさそうに言う。
だが、文はまったく気にはしていない。

寧ろその謙虚さを何処かの誰かさんにも見習つて欲しいな……と思つていた。

言うまでも無く、弦一郎の事である。

「そっかー！」

うんうん、それでも良いでござるよ？

旦那あ、小魚を少し貰うでござる」

「え、あつ？！文之進っ勝手に某の飯を食うな！！」

「ケチだねえ？旦那はー……ぷっ」

あまりにも必死な形相でいう弦一郎に吹き出して笑ってしまう文だった。

「笑つたな！文之進のくせに生意気だ！！」

「関係ないでござる」

「くっ！」

「またもや言い争いになる二人。
本当に大の大人なのかと疑うくらい子供っぽかった……。」

「げ、弦一郎様？」

「まだおかわりはあります故…安心なさってくださいな？」

「ま、まあ…そうだが……。」

「華乃に言われると言い返せないのをござるな& a m p ; # 8 2 5
2 ;

「…違うのでござるよ、華乃ちゃん！」

「ただ華乃ちゃんの作った物が……。」

「だっ！？それ以上言うたら、いくら文之進でも許しはせんぞ！！
！」

「はいはい。わかっているでござるよっ」

「まったく、わかっているのなら最初から言うでは……。」

「じゃーあと、もう少しだけ…貰うでござる！ー！」

「いい加減にしろっ！ー！」

「また喧嘩が勃発した。」

「箸同士でつかみ合う、お行儀が悪いとは事のことだ……。」

「やれやれ…まったくあの人達は……。」

「あ、お紗枝さんっ」

「男は幾つになっても子供と言う者
…しょうがないったら、ありませんねえ」

「あはっ…あはは………」

そう言うお紗枝に、苦笑しか出来なかった華乃だった。
そうこうして、お紗枝と華乃で話しているうちも喧嘩は続いていた。
箸を使った行儀悪い闘いが…。

「やめなさい!!」

「お紗枝さん?!」

お紗枝さんの一喝でぴたっと止まる。

「いい年越しした殿方が…みつとも無いと思いませんか?」

「「ご、ごもつともです…」」

二人ともお紗枝には頭が上がらないようで
文については、いつも語尾につけている「…ござる」も付いていな
い位だ!

「まったく、殿方なのに…女性を困らせてどうするのですか？
華乃がどうしたら良いのか、困っているではありませんか」

「す、すまぬ！…しかし…文之進が…」

「つい、旦那が……」

「言い訳は見苦しゅうございますー！」

「「はひい！」」

怯えた様子で、背筋をピンと伸ばした。

こうして、お紗枝によるお説教が小二時間近くは有ったそうなの……。

「（これは、温め直した方が良いでしょうか…？）」

冷め切ったお味噌汁を見詰めて華乃はそう思った。

「ふう…お紗枝は説教が長いな……」

弦一郎は、地獄耳なお紗枝に聞こえない様に呟いた。

「…まったくでござる……」

文も同様。

ぼそぼそとした声で言った。

「は、腹が空いたな……」

「拙者も……小腹とか、そういう領域では無いでござる」

先ほどの喧嘩のせいか、お腹の虫が先ほどからひっきりなしに鳴いているのだ。

だが、先ほどのお紗枝から「朝ご飯は抜き！」と言われ何も食べられない状態に陥っていた…。

こつそり、食べてしまえば良いものを…。

それすら、バレた時を考えると恐ろしいのだろう。
ずるをする者は居なかった。

「失礼します」

そう、畳にひっくり返っている所に華乃が来たのだった。

「は、華乃か…すまぬ。もう某…腹が減りすぎて力が……」

「もう、動けないでござるよ……」

「ふふっ、そうだと思ひまして…はいっ！…」

華乃が二人の目の前に出したものは…。
なんと！？さきほどの朝餉だった…。

「あ…先程の朝餉え…」

「じくん…でござるなあ…」

生唾をごくつと鳴らして、穴が開くくらい朝餉に目が釘付けだった。
そして、華乃はきよろきよろ廊下を見渡してから
向き直って人差し指を口にあてて言った。

「お紗枝さんには内緒ですよ？」

こそこそと二人だけに聞こえる様に言った。
そんな言葉に二人の大の大人は涙して感動した。

「は、華乃は仏様だ…」

「いや、旦那！もう、神様の域を超えてござるよ?!」

大人が二人揃って涙を浮かべながら、ご飯を頬張る姿は…何とも哀れなり。

本当にお紗枝の言う通り…みつとも無い姿だった。
そんな姿を華乃はそうは思わなかった。

なんだか、微笑ましくて…。
見ているだけで、幸せな気分になった。

今までになかった…温かいモノがここには有るのだと実感した。
そして、二人の喉に何かが詰まらない内に…お茶を用意しようと急いだ華乃だった。

…この後、案の定…二人仲良く同時に喉にご飯を詰まらせたと言う…。
…。
情けない醜態を見せたのだった…。

これが、名を轟かす武将とその忍なのかとは他から見てもそう思うくらいだった。

お茶を運び、二人の背を優しく撫でてあげた華乃だった。

その背後で、お紗枝さんは潜んでほくそえんでいた…ことは、この三人は知らない…。

その状況下では弦一郎と文は…華乃が将来、お紗枝の様にならない事を望むのであった。

第参話：城下町へ…

ある日……戦もひと段落した頃。

幸村様から

「華乃も連れてくるように」と言われたので

華乃も同行してお館様で在らせられる幸村様のお膝元まで出向いた。

座敷に入ると、独特な雰囲気にも包まれる。

温かいような、冷たいような……。

まさに停滞前線でもあるようにだ。

中央の座敷の奥に、どっかりと座る幸村様が居た。

その後ろに、控えて仁王が膝を付いている。

「よく来たな、華乃」

「はい…幸村様には、お世話になりました…私、華乃は幸せでござ
いまする」

「それなら、よい。私も本望と言おう…ふふっ」

華乃が来たとなん、場が和んだ。

先程までの停滞前線はどこにやら？

幸村様も、さっきの硬い表情は消えて…顔が緩み満面の笑みだ。

「（溺愛で…）」

隣に居た仁王はそう思った。

多分、この場に居た者なら誰もがそう思っただろう。

「（何とか首は繋いだな…文之進）」

「（そうでござるな…旦那あ…）」

この二人が恐れる位、幸村様は恐れ多き人なのだ。

特に気に入ったモノに対しては、必要以上の執着心で…。

奪った者、壊した者については…重い罰を下すのだそうだ。

それは近くで見て、知っている弦一郎と文は痛いほど良く知っている。

「……ところで、本題に入るが…。

そろそろ、城下にでも行っ見てはどうだ？

華乃も気晴らしになろうぞ？」

「良いのでしょうか…？」

「もちろんだ…それでだ、幸村と文之進には…どちらか二人が華乃の護衛を任せようぞ？」

「はい」

「拙者は、まだ情報収集の仕事が終わっていないでござる故…

「ここは弦一郎様にお任せしたらいかがですか？」

「そ、そそ、某があ？！」

「ふむ。なるべくなら、文に頼みたかったが…仕事なら仕方あるまい。」

「私も…情報は早く知りたいからな。よいか？弦一郎？？」

「…は、はい。お任せよ……」

こうして、華乃は町に繰り出す事になった。

城に帰ると、どこから聞きつけたか分からないが既に出かける事が知られていた。

華乃が仕事に戻るとたんにこれだ。

「弦一郎様と逢引だって？聞いたよぉー」

「華乃が羨ましいわぁ」

「だって、あの弦一郎様が…」

「普段は相手にしないしねえ」

…と、女中の人がひっきりなしに華乃に詰め掛けた。

「ははっ、皆さん情報がお早い……」

でも…逢引というわけじゃ…」

「ここには、お紗枝さんが居るもの。あの方、密かに幸村様と通じているの」

最後の方は、耳打ちで話された。

「えっ、そうなのですか?!」

勿論、華乃は驚いた。

その後は、すぐに納得ができた。

あのお紗枝だ…あの情報通は、近くで聞いていないと分かるはずがない。

「…だから、女中の中で一番偉いのよ?」

「そうなのですか…」

「まーそんな事、さして気にすることじゃないよ? だからって、えばり散らすという事もないし…」

「そう…ですね!」

だからと言って、お紗枝さんはお紗枝さん。変わりようの無い事実だと華乃は思った。

「そうであゝ。弦一郎様との逢引じゃあゝおめかしをしなくちゃね？」

「そうだなあ！私の化粧道具を貸してあげるわ！」

「私は、髪飾りを」

「昔、私が来た外着ならあげるよ」

「み、みなさん……」

感動した華乃だった……が。

明日に分かることになる。

「まだで…しょうか？」

「弦一郎様とでしょ？これくらい、気合を入れなきゃね？？」

「そうですよー」

「正式には”逢引”では無いんですが…」

そんな弁解も通用せず。

朝から、ご飯も食べずに取り掛かっている状態だ。

完全に人形状態だ。

先程から数刻は経過しているが、なかなか終わらない。

あーだ、こーだと…討論も挟んでいるから余計に時間が掛かる。

「ま、まだだろうか？」

「…でござろーかぁー！」

先程から、それに付き合わされて待っている男集団。

「女の子は時間がかかるものですわ！」

「でももう数刻」

「待つのが男の役目です」

「わ、わかつているが…」

「それをお分かりだから…幸村様は、最初からこないのですよ?」

「た、大将…そりゃ無いでござる」

「あと半刻でもしたらいらっしやるわ。」

幸村様、華乃の姿を楽しみにしていっしょにいたもの」

そう楽しそうに言ったお紗枝だった。

「お待たせしてすみませんっ…終わりました!」

待たせちゃいけないと言う華乃の気持ちが急かさせた。

襖がガタツと開く。

音がなつてから、不味かった事に気づき「すみません」と付け加える。

だが、そんな些細な事を咎める者は居なかった。

それは、何故かと言うと…華乃に関係している。

華乃は着飾っただけではなく。

女中に人形のごとく弄られて、髪形は上に結わえられ顔は若さを生かして白粉を少々と淡い赤の口紅を…。

まあ、随分と凝ったことをしてくれていた訳で…。

凄い、変貌振りに男集は固まっていた。

無論…例外も居るのだが。

「…いやあ、華乃。随分と可愛くなって…私は嬉しいぞ!!」

幸村様も先程来られたのだ。

ちょうど良いくらいに来たのは、仁王のお陰だろう。

「はっ…ゆ、幸村様?! 苦しいでございますっ!!」

あまりにも可愛さに打たれたのか、その衝動を抑えられなかったのか?

愛しさが込み上げて、抱きしめる形になった幸村様だった。

「すまないなあ…あまりにも、可愛いからの」

「い、いえ…嬉しゅうございます!!」

にこつと微笑む姿も男共には、心臓に悪い事だった。

「(はっ、しまった…俺としたことが!?)

華乃が予想以上に可愛いから…) ほ、本当に可愛いでござるね!」

「ありがとうございます!! 文之進さん」

「（うつわ、これでござる…必殺満面の笑み…）…って！ほら、旦那も！！」

「あ、ああ…！き、きき、きれっ…綺麗な着物でござるな…！」

「（あーあー。やつちゃったよ…普通、着物は後だろ?!）」

額に手を当てて頭を抱え込む文だった。

まったくこの人は、何て初心なのだろうか？

そう思わずには居られなかった。

普通なら着物より、本人を褒めるべき筈…なんだけど。

弦一郎の場合、恥ずかしくってそれが精一杯の褒め言葉だった。

それは、弦一郎なりの照れ隠し。

それが華乃にどう伝わるのかどうかは怪しいものである…。

「…ば、馬鹿者が…。」

「本当、甲斐性無しですわね！」

幸村様に続き、キツイ一言をお紗枝が言う。

当人の耳にも入っているらしく…かなり凹んでいる様に見える。そのせいか、前に項垂れていた。

「…ふふっ、気にしていませんよ？弦一郎様？？」

「は、華乃……。」

「私…この着物が褒められて嬉しいです…♪
気に入っていますから」

「…ありがとうございます…」

この言葉は、華乃なりの気遣いか？
それとも、事実かは定かではない……。

「行きましょう？…弦一郎様??」

「あ、ああ!!」

やっと元気を取り戻した弦一郎は力強く答えた。

「（やれやれ、まったく旦那は……）」

微笑ましく思う反面、何故か寂しく思う気持ちもある事に気づく。

「（何を思っているんだろうな…拙者は）」

その思った気持ちを脳裏の奥底に無理やりしまい込む文だった。

「そ、それでは…某、行つて参ります！幸村様！！」

「行つてきます！」

こうして文と幸村様に別れを告げて出かけた二人。

「…頑張れ、旦那」

ぼそりと静かにいう文。

寂しさを胸に見送つたのだ。

「…そう言つ訳で。」

仕事は免除するから…弦一郎の様子を見て来い！！」

「はっ？…どういう意味でござろつか？！」

「様子見だ。」

大事な娘同様の華乃に何も起こらんようにな！

…わかつたなあ？文よ？？」

「ぎよ、御意…」

そうは言つても、嫌だと言わんばかりに文の顔が歪む。

少し予想していたとは言え、本当にするととなると話は別である。

「まあ…華乃を私の側室に迎えても良いが…な……ふふっ」

なにやら、恐ろしい考えを耳にしまった文は…ぐうとも口には出来なかったと言う。

その随分な扱いにほとほと呆れた。

「（拙者だって、大切にしていない訳では無いでござる）」

そう…文も幸村様同様。

今までだって、妹以上に見た事がなかった。

それほどまでに大切に接してきた…。

実の妹のように…。

恐らく、これから先だってそうだと思う。

これ以上の気持ちにならなかったらの話だが…。

だが、自分の主はそう言う訳には行かない所まで既に来てしまっている。

そう…恋愛感情と言う名の淡い心持だ。

きつと、今の弦一郎に言っただとこで…。

「こい？あれは骨ばかりであまり食うところがないから、鯉は好きではない!!」

…とても、言いかねない。

「（…いや、絶対言うでござる…！！旦那なら…いいかねんぞござるよお…）」

そう、無駄に確信をしてしまった訳だ。

そのくらい、弦一郎は初心で…戦の強気は何処へやら？
という具合に極端に、弱気になってしまうのだ。

だから、華乃と離すときは…おどおどする事が多いのだ。

「（本当は……気が進まないでござる…）」

それでも、ここに見張りに来ているのは幸村様の命令だからだ。

弦一郎なら、緊張して話せないと踏んでいた文之進だったがかなり
当てが外れていた。

実際、楽しそうに…まるで昔から恋仲の様に親しげだ。

甘味好きな弦一郎と華乃は話が合うのだろうか？

そう、文之進は思った。

「……良いことだけだね？」

文之進としては複雑で…。

祝いたい気がするが、邪魔したい気もある。

「（ま、そんな事をしたら幸村様が黙っては居ないだろうけど…）」

あの人は、二人とも娘息子の様に思って可愛がっている。

そのうち、2人の間に出来た子を自分の「孫」の様に可愛がり始めるだろう。

そんな光景が目の前に浮かぶようで、更に複雑な文だった。

そうしたら、俺がお守りでもするのだろうか？

それはそれで、微妙な心持だ。

「（さつてと…、取り敢えずこのまま見張りますか！）」

気合を入れなおした文は、再び茂みに隠れた。

弦一郎と華乃の行方を見守るために…。

第肆話：茶屋にて…

一方、2人は相変わらず仲良く話しながら町へ下った。

ようやく着いて、目的地の団子屋である『桜屋』を目指した。
その前に繰り広げられる、町並みに…華乃は感動を覚えた。
活気に満ち溢れている、町々と人々。

それは城から一步も出たことがない華乃にとって新鮮な光景だった…。
さっそく桜屋に着くと……。

「わあゝ素敵っ…ふふっ」

華乃はまるで幼い少女の様にはしゃいだ。
そんな姿を眺めている弦一郎は、微笑ましく見ていた。

「それ程、珍しくはないが…？」

「あっ…えっと……」

さっきの微笑とは違って、今度は悲しそうに微笑んだ。

「わ、私…こういう所に来たことなくて……ごめんなさいっ、下手

に騒いでしまつて…」

「あつ…」

弦一郎は言つてから、自分が華乃に対して酷い事をいったなと思ひ知つた。

確かに、華乃にはそんな経験が無いのは当たり前だ。

それほど前の生活はは厳しい所だったのだろう。

普通なら、この年の女子。

町に出て、甘味やら簪やらと見ていてもおかしくは無い。

それだけ、華乃の家は厳格であつたのだろうか？

それならば、まずい事を聞いてしまったと弦一郎は後悔した…。

「ははっ… 本当に何をやっているのでしょうか… もう、子供ではないのに…」

「い、いやっ… 存分に騒げば良い！ 大いに… 結構だ」

「…?! …… はいっ ♪」

その言葉に、また華乃は笑みを浮かべる。

前の笑みとは比べて、今度は無邪気な笑顔だった。

その微笑みは、辺りを幸せにする不思議な力があつた。

辺りは、華乃に釘付けだった。

特に周りの男がだが…。

「は、華乃！そろそろ入ろう」

「……？はいっ」

そんな視線には、華乃は気づくはずも無い。

それでも、弦一郎は察知をして早く団子屋に入ることを勧めた。

「あらあら、弦一郎さん可愛い子を連れてきたのねえ〜これかい？」

中から出てきた、おばさんはニコニコと愛想が良い笑いをして弦一郎に向かって小指を立てる。

つまりは『恋仲』か？と言うことだった。

そんな事を聞いてくる辺り、親しいのだろうか？

弦一郎の事だ。

毎日の様に通いつめているのではないかと華乃は思った。

「そ、そそ、某と華乃は………破廉恥な関係じゃないぞ！」

「いえ、そういう関係ですよ？」

「は、華乃？！」

「……な〜んちゃって」

「な？！脅かしたなあ〜？？」

「だって…あんまりにも否定するから……私の事が嫌いみたいにお
っしゃるから……」

「うぐ…わ、悪かった」

「…ふふつ、ではお団子を奢ってくださいな？」

「しょ、承知した！」

こうして、弦一郎の奢りで食べることになった。

「それにしても、仲が良いねえ」

「はいっ弦一郎様には、良くして頂いています」

「そーかい。良かったねえ」

「あ、お岩殿！いつもの！！」

「はいよっ！華乃ちゃんは何にするかえ？」

「えっと、ここのお勧めを一つ…」

「それじゃ、桜餅だぞ！ここのは天下一品故！！」

お岩さんが答える前に、素早く答えた弦一郎。
ほど、通いつめて詳しいとみた。

「じゃ、それを持ってこようねえ？」

こうして、出来るまでお茶をすすっていた。

「お茶も美味しいですね？」

「そうだな…ここは、某の一番のお気に入りのお店ゆえ」

「ふふっ、弦一郎様はよほどお気に召しているんですね？」

「…や、やはり…男が甘味など、女々しいだろうか？」

「いえ、同じ事を共有できて嬉しいでございます！」

「そうか…なら良いが……」

こうして、話しているうちに注文した物が出来たらしい。

「はいよっ、弦一郎さんの方からねえ」

「おっ！お持ちしていたぞ！！」

「こ、これ…食べきれるのですか？！」

華乃は弦一郎が注文した物の数に驚愕を覚えた。
団子の種類が、みたらし、餡子、蓬など。
本数は何と、50本近くも有るではないか?!
それでは、華乃が驚いても無理はない本数だった…。

「ああ、そうだよお？」

良くもまあ食べるもんだねえ、弦一郎さんは。
それでこの店も繁盛するってもんだけど……」

「それでは…んぐつ、良いではないか！」

団子を両手に6本くらい持ちながら頬張りながら喋った。
何と言う、食欲だろう……。

胸焼けなどはしないだろうか？

華乃はそう心配になった。

だけど、いつもの事だと思つと、その辺は大丈夫なのだろうと華乃は思った。

「いつもこうなのだよー弦一郎さんはあ。

あまり、甘いものばかり食べていても身体を壊すだけだあー？

華乃ちゃんからも言つてやっておくれえ？」

「そ、そうですね…」

華乃は言う前に、あまりにも勢い良く食べる弦一郎には、呆れて一

言も喋れない状態だった。

「ほら、弦一郎さん？華乃ちゃんが呆れていますよあ？」

「はっ、すまぬ！華乃。…けれど、これくらい食べないと…食べたという気がせぬ…」

弦一郎はしゅんと母親に叱られた子供のように、項垂れた。

そんな子供っぽい仕草は、今まで華乃は見たことが無かった。

どちらから言えば、打ち所が無い弦一郎に尊敬していたし、兄のようにも感じていた。

だが、この様子や団子を一生懸命頬張る姿は…いつも見ている厳格な弦一郎とは異なっていた。

そんな一面を見られて、華乃は嬉しいと心の底から思った。だって…弦一郎は華乃にとって……。

と、一瞬思っ、思い直した。

「（わ、私は何を…！？）」

そう思っ、初めて自分の気持ちを気づいた。

今まで、気にも留めなかった気持ちは、淡い恋心。

「（わ、私は…弦一郎様の事に…恋しているの…？）」

気づいた瞬間には、もう留めなく愛しいと思うだけだった。

だけど、同時にこうも思った。

『私…弦一郎様とは…身分が違う…!!』

そうなのだ。

この時代には、身分結婚が当たり前にある。

等しい身分でなければ、結ばれる事は無いという暗黙の了解だ。
華乃は、この時ほど…自分の出身を悔やんだことは無い。

「は、華乃?!」

「えっ?」

「何故、泣いているのだ?!」

こ、これつきり団子の食いすぎにはやめるから!
なあ?!心配するな!!」

「…はい。そうしてくださいね?」

弦一郎は勘違いしている様だが…それはそれで良いと思った。
こんな穢れた私が、想いを告げても何にもならない。

かえって弦一郎様の重荷になってしまう。

だから…この気持ちには、奥底に留めて想おう……。
そう、華乃は思ったのだった。

「あーあー、弦一郎さんだったらあ？こんな、めんこい子お泣かして！罪作りだなあ？」

「お、お岩さん。これは…そのお…私が悪つごいます故っ」

「これは責任もって、嫁さあゝ迎えねえとなあ？？」

「そーだぞお？」

他の人も参戦して弦一郎を攻め立てた。

「ああ、どうしたら良いのか？」と華乃は困った。

「華乃を嫁にだど！？は、破廉恥なツッ」

初心な弦一郎は顔を熟した林檎の様に真っ赤にして言った。

「そー言っけど、本心は嫁にしてえだろ？」

「……………うむ」

こっそりと弦一郎に耳打ちしてきたおじさんの問い掛け。
弦一郎は正直な性格故か、本当のことをぼそつと打ち明けた。

もちろん、華乃には聞こえないよう…にだっ！

「ほらさあ？早く祝言挙げる？若もん！！」

「だ、だから某は…ッッ」

「素直になりな？」

ぎやはははつと団子屋は笑いに包まれた。

弦一郎は、大丈夫かと心配する位に茹蛸になっていた。

「（弦一郎様にはもっと…相應しいお方が居る

……嫁が私であつて良いはずが無いわ…。

もっと、清く美しい方で有らせられなければ……）」

騒がれる中、華乃は一人…さきほど持つてこられた桜餅を食べながらそう思った。

自分は不釣合いだから、結ばれるはずがない…と。

そんな、悲しい思いを胸に秘めた。

喉に通じづらくなった。

なので、残りは弦一郎にあげようと華乃は思った。

そうしたら、弦一郎のことだ。

きつと、子供の様に喜ぶだろうな？と華乃は思った。

「弦一郎様？」

「な、なんだ！？華乃？？」

まだ、冷かされた余韻が残っているのか、どもりが抜けていない。

「この残りの桜餅を差し上げますよ？」

「よ、よいのか？！」

案の定…言った瞬間、パツと表情が生き生きする弦一郎。
本当に子供みたいだと思った。

この人は…心はまだ、少年のままなのかもしれない。
こんな立派な殿方を捕まえていう台詞では無いが…本当にそう思った。

「某は良いのだが…しかし、華乃は一つしか食べていないではないか？！」

「いいのです。あまり、お腹が減っていないので…」

「うむ…それなら良いが……」

最近、あまり食べていないと聞いている。ちゃんと食べないと駄目だぞ？」

「は、はい…そうですね」

とは言つものの、食が最近進まないのは確かで。
あまり、食べ物を口にしたく無くなっている。

「それでは、某の団子と交換だ！どれが良い？！」

「え？えーっと…それでは蓬を……」

「蓬だな！ほら、食べよう」

「は、はぁ…ありがとうございます…？」

「まだ、ある故。たくさん食べても良いのだぞ！！」

「はい…」

華乃はその言葉だけで、胸がいつぱいになった。
その優しい言葉だけで、華乃は満足だと思った。

「（そう…弦一郎様が優しいのは…お館様の命令だから……）」

その事を忘れまいと胸に良く刻み込んだ。

こうして、楽しく…切ない団子屋での思い出になった。

第伍話：遭遇

「次は、どこへ行きたいか？」

「弦一郎様におまかせします…。あ、あまり知らないの……」

「…そうか！では、あそこの店を覗くでしょう！！」

次に立ち寄ったのは、飾り物がある店だった。

「…わあ……綺麗」

華乃には、とても美しく見えた。

確かに色とりどりの簪や櫛などが売っている店であった。
今まで、この様な装飾の店に来たことが無かった華乃は、嬉しくてたまらなかった。

「…何か、欲しいものはあるか？？」

「えう、いえ…そんな……」

「遠慮する事は無い！！俺が奢る」

「…でも」

「お、此れなどどうだ？」

「うわぁ…綺麗でございますっ」

「だろう…こう……するのだなっ…？」

手に取った、華が色とりどりに飾ってある簪を手にとった弦一郎は、華乃に付けた。

その姿は、更に華乃の魅力を引き立てた。

「…良く、似合っているぞ…！！」

「…ふふっ、ありがとうございます！」

少し照れたように、言う二人。

他の人から見れば、仲の良い恋人に見えるだろう。

「…でも、私には…華美過ぎます故……」

「う、うむ。確かにそうだな…」

「お気持ちだけ、頂いておきます！…あっ」

「どうしたのだ？」

「これ…」

「髪を結う紐か？」

華乃が声をあげて手に取ったのは、紐というには、太い。どちらかと言えば、弦一郎のしている鉢巻に近かった。

「これがよろしいでございます！-！」

「そのようなものでいいのか？」

「はいっ」

華乃はにっこりと満面に笑った。

しばし、弦一郎は見とれてしまう。

「そ、そうか…なら買おうか……」

「それにするのかい？これはねえ…西洋から輸入してきた『しるく』という極上の布でできた『りぼん』という代物らしくてねえ…お客さんの目が高いね？？」

そう愛想良く、売ってくれたおばさん。とても愛想良く、包みに入れてくれた。

「これからは、この『りぼん』で髪を結いますね」

「ああ…それが良からう……」

そう仲慎ましく話していた。

そんな折、次は何処に行くかで話していたときだった。

「よう！荒くれだろ？」

「えっ?!」

手をぽんつと軽く叩かれる。

町中で話しかけられる事を想定していなかった華乃は驚いて振り向いた。

そして…こう呼ばれるなんて思ってもみない。

「Cuteな格好しているな？」

「伊達ま……むぎゅ?!」

「ば、馬鹿!!忍中なんだから本名を言うなッ」

「あなたですよ…?」

「片倉殿?!」

「どうして…こんな所に…」

「だから…御忍びだつて言っていんだろう？OK？？」

「お、おーけー??」

「…わかったか？つて意味だ」

「わ、わかった…か」

「まさか、貴女様でしたとは…」

「久しぶりだなあ？『荒くれ』??」

「……」

華乃に話しかかれるが、沈黙を守つたまま…。

弦一郎は…政の言っている意味が分からずにいた。

「『粗暮れ』？いったい何の事だ？」

「Ah？言つてねーのか？こいつは良い!!」

「…まだ、弦一郎様には……」

「言えないってか？はっ、随分と可愛くなつたじゃねーの？
前とは比べモンにならないな？」

「…こう、言っておりますので……。その方にもう私たちとの関係を聞かないで頂きたい」

「む、わかった…」

納得はいかないが、そうする他なかった。

強引に聞いて、華乃に嫌われたくはなかったからだ。

「本当に、綺麗に着飾ったもんだぜ…？荒くれ……」

「今…は、『華乃』と名前があります故！」

「『華乃』ねえ？確かにお前には…逆に似合っているかもな」

「ありがとうございます……」

「素直だな？」

華乃の頭を…奥州筆頭、伊達政は撫でた。

大切なものを愛しむかのように……。

その光景は、弦一郎には耐えられなかった。

「ま、此处で会ったのも何かの縁だ…。今から俺のことは『藤次』と呼べ…良いな？」

「さて、茶でも飲むか」と言って、皆を引き連れて、店に入る。

「もう、昼時だ…俺が奢ってやるから、好きな食べろよ！」

「…頂きます」

「かたじけない…」

二人は乗り気ではなかったが、此処まで来て何も頼まないのはなんなので、奢られることになった。

「んで？どうして、弦一郎の所にいるんだ？」

「倒れている所を救っていただいた経緯でございます…」

あまり、表情を出さずに言う華乃。
それを見て、何やら不安が残る弦一郎だった。

「拾ってねえ…？見られなかったのか？？」

「たぶん…そうだと思いますけど…」

「Ha！だろうな？それで無ければ、弦一郎が傍に置くわけがねえな」

一体何の話だ？

そう疑問が募るばかりだった弦一郎。
だが、割って入れるほど…野暮では無い…と弦一郎は思った。
しかし、気になるものは気になる訳で…。

「（一体、政殿と華乃はいかなる関係なのだろうか…？）」

まさか…恋仲ではないか？…と考えたが、嫌で頭から消した。こんなに嫌がつているのだ…恋仲では無いだろう…！

そう思うしかなかった。

「んで、弦一郎よ？どうだ、甲斐の方は…」

「順調だ」

「ほーそれは良いこつた& a m p…！」

はははっと笑う藤次。

隣で、小十郎は肘をついて、「やめてくだされ」と言った。

「ま、それなら良いさ…弦一郎よ？」

ぐいっと茶を飲み干す藤次。

「…さあて、そろそろお暇するか…」。

邪魔しちゃ悪いしなあ？だろう、弦一郎？？」

「そつは…」

「云ってはいない。だが、顔に出ているぞ?」

うつ…と言葉に詰まる。

それは、凶星だからだった。

「ま、精々。

奥手な弦一郎のこと?

口付けも交わしていないのだろうか?」

「と、とと、藤次殿?!」

「凶星だな?」

「は、破廉恥な!」

「おまつお前…: そんな事だと
そのうち呆れられるぜ?

いくら、荒くれ…いや、華乃だったなあ?」

「藤次様!」

あまり…弦一郎様をからかうのは、御止め下さい!」

「ちつ…面白いのになあ…:」

「藤次郎様!」と後から、小十郎も咎める。
すると、渋々「OK、OK!」と了諾する。

「…私と弦一郎様は、そんな仲ではありませんから!」

「わかったって言うてんだろー。しつこいぜ?」

「…何と、言われ様と否定させて頂きます!」

「だってよお?お前、拒否されてんぞ?」

「う、う…っ」

「余計なことを言わないで下さい!」

「Sorry。わかった、わかった」

そう言っている割には、反省の色は無い当時だった。

「では、失礼させて頂きます」

「See you again!!」

こうして、嵐という名の伊達政と従者小十郎は帰っていった。

一体、甲斐まで何しに来たのだろうか?

二人はその疑問を残したまま……。

「荒くれ……いや、華乃……
いい”女”になっただじゃねえーか……」

「政様……まさか……」

「ちよいと手に入れたくなっただけ……かな？」

「はあ…お戯れもほどほどになさってくださいね?」

「へいへい…」

こんな会話をしているなんて、華乃や弦一郎は知る由も無い…。

第陸話：明かされる真実

…伊達との遭遇から数日が経った。

ある日の事…事態は一変したのだった。

やはり、この戦国乱世には…平穩と言つのはないのだろうか？

華乃もそんな“事情”に巻き込まれていくのであった。

幸村様からお呼びが掛かった。

それも華乃を連れてだ。

何故だと、不穩な空気を感じ取ったが…弦一郎は従う他無かった。

彼は、武隊でも一の従順な武将であつたからだ。

「ゆ、幸村様！今日はどのようなご用件でしょうか？」

「よう来た、弦一郎。そうだな、用と言えば…どちらかというと華乃の方にある！」

「私…ですか？」

「そうだ…お主は、別に記憶喪失…と言っわけではないな？」

「はい、そうでございます……」

「うむ。それなら良い。」

弦一郎 次からの戦は、華乃にもでてもらうぞ？」

「なっ…何ゆえ、華乃が戦に！？」

「それは本人か文に聞くのだな…」

幸村様は、華乃を見つめて言った。

華乃はと言つと…この居辛さから開放されたいと願うばかりだ。

「華乃は良いか？」

「はい…幸村様」

こうして、華乃も戦に出ることになった。

「す、すまねえ…旦那…。」

見つけた時…見ちまつたけど。

華乃が…武將を薙ぎ払っている…ところを。
でも…それでも！

普通の女の子にしか見えなくて…」

「もう、良い

…何があるうと、華乃は普通の女子だ…。」

「弦一郎様…」

「某も…薄々は気づいていた！

…だが、信じたかった」

「ゆ、幸村さ…」「だが、事実だと分かった以上しょうがない…
…それでも…っ！そ、某は…お前の事を…。」

弦一郎は華乃を抱き寄せた。

大切なものだから…こそ…。

手放したくはない…！

強く…離れない様に…。

「弦一郎様…私は…。」

「何も言う…な……」

「いえ…言わせてくださいっ

…私は…弦一郎様の事を…お慕い申しております…
…名前を頂いた…あと瞬間^{とき}から」

「そ、そそ、そそそ某もだ…っっ！」

「嬉しいです…」

ぎゅっと抱きしめ返した華乃に対して
弦一郎は…自分のやった行動にやっとな付き
あたふたし始めるのであった…。

「ひゅっ」

熱いねえ、お二人さん

俺を居る事、忘れてさっ……」

そんな二人の後ろで涙を飲んでいる忍も居たと言っ。

戦前の夜。

弦一郎と華乃は夜涼みに出かけた。

ちゃんとした…話を聴くため。

「弦一郎様…今まで黙っていてごめんなさい」

「もう良い。

某は何も怒ってもいないぞ？」

「ありがとうございます」

サアア――

二人に風が吹き付ける。

「しかし…話してくれる気になったのであろう？」

「はい…

弦一郎様には、ちゃんと話しておかなければと思っていました」

風に流される華乃の黒髪は……

満月の光を受け……妖艶になびいた。

「私は……あの時、伊達様がおっしゃられたとおり――

——『荒くれ』と言つ名の……

です……。」

——
” 人間兵器 ”

そう言い放った華乃からは……

あの優しい面影や幼い微笑みは……感じ取れなかった。

……まるで――

感情の無い……人形のようにだった。

第漆話：闇から抜け出す

「私は……番号9746351
あらくれもの
”荒者”の称号を受け継ぎし者」

淡々と語る華乃。

輝きを亡くした瞳で弦一郎を見つめる。

そんな華乃に見られるのは……耐え難いのであった。

「……そして、二刀使い
あの戦場で敵殲滅を命じられていた」

「私は……人殺しの兵器……
戦の駒だけのために育成された存在……ッ」

華乃の瞳から、一雫^{ひとしずく}の涙。

それを切っ掛けに震えが止まらなくなる……。

「……もう、良い」

華乃を抱きすくめ
なだめるように髪を梳いた。

「げん……いちろう……さま…ッ」

「わかった……
もう話さなくていいぞ？」

「……駄目なのに……」

「何が駄目なのだ？」

優しく囁きかけるように、弦一郎は華乃に問うた。

「駄目なの……私ッ……
弦一郎様には相応しくない……！」

「そんな事は…某が決めることだ」

「でもお…」

「こんな人殺しの”荒者”の私なんか…ッ」

「華乃は…華乃だ…」

「たとえ…どんなことがあるうとも
某が愛するのは、お前だけだ…」

「げんいちろう…さまあ ああ」

その後は、喘ぎ声のみ…。

華乃は弦一郎にしがみついて泣いた。

それは…身体から水分がなくなるまで――。

「……落ち着いたか？」

「はい……」

泣いて泣いて泣いて……。

泣き散らした華乃は、目が赤い。

「ハハッ……」

「……何か、おかしいのですか？？」

「そうじゃない……」

今の華乃は……まるで、うさぎのようだ

「……ッ」

華乃は気づいて、ぱつと顔を覆った。
すぐく……気恥ずかしかった。
あんなに泣いた後ではあるが。

「隠さなくてもいいだろう？」

「だって…弦一郎様が笑うから……」

華乃は顔を少し上げて、拗ねた様に視線を下に下ろして頬を膨らませた。

そんな姿を愛らしい……と思ってしまう弦一郎だった。

「す、すまない……」

別に某……おかしいから笑ったわけではないッ！！
そ、そそ、その……可愛いと……思ったのだ」

「……ふふっ」

「……でも、華乃は笑った顔が一番だ！」

華乃も弦一郎も……笑顔になる。

さっきまでが嘘のように…。

「弦一郎様……」

「何だ？華乃……」

「私は、弦一郎様のお傍に居て……よろしいですか？」

「無論だ！某から願いたいくらいだ！！」

共に……傍にいてくれるか？」

「はい！！」

例えばどんなになろうとも……弦一郎様から離れませんっっ」

「うわっっ？！！」

そう言った華乃は弦一郎に飛びついた。
行き成りだったため、かなり驚いてしまう弦一郎だった。

「わたくし…華乃
この命に換えても……弦一郎様をお守りします……」

第捌話：武田での初陣

華乃の初陣は伊達軍との勝負だった。

「Are you ready?！」

「「「Yeah!!!」」」

この英語交じりが、我々武田軍が攻め入る軍だ。
伊達政を筆頭に片倉小十郎などを従え攻めて来た。

「我ら武田軍の力を見せてやれ！」

「「おおおおお!!!」」

これが本来の勢いだろう。

そうして、武田軍VS伊達軍の戦いが幕を斬った…。

「華乃……行くぞ？」

「はい、弦一郎様！」

私、『二刀流荒者』華乃！

弦一郎様のお背中をお守りいたしますっ」

「そうか…では、某は
は、華乃の背を守る！」

「…！はいっ！！」

こうして、初陣は幸村共に出撃をした。
凛々しい、女武士…。

「Why? 何で女が居るんだ」

「政宗様…！あの女子、結構なやり手と見受けられます！」

「あれは… Ha! 華乃じゃねーか！」

「なんと?! もう、戦に参戦しようとは……」

「Oh… いいじゃねえか… さて、俺も Start するかな？」

「では、出陣の御支度を…」

こうして、独眼流……伊達政も出陣したのだった。

「Hey Cute Girl? I'm happy to
see you！」

「あ、あなたは…伊達政？」

「It's great! 当たり前だぜ”荒者”?」

こうして出会ったからには、応戦するしかない
華乃は刃を構える。

「荒者 華乃……行きます!!」

「上等だ!!」

斬り合いは続き、横線一方。
このまま続ければ、体力的に華乃は確実にやられる!!

キイイン

「どうした? こんなものかよ!!」

「くっ……ま、まだまだああああ!!」

「おっと……できるじゃねえーか!!」

キイイン――

――キイイン

刃を交えるたびに、火花が散る。

だんだん、攻めも守りに変わっていく。

もう華乃の腕はびりびりと痺れを切らしていた。

「（ここでやられる訳には…

…まだ、お役にたてていないと言うのに！）」

その時、華乃は死を覚悟した。

自分の弦一郎への恩返しを返せないと後悔し……。

「華乃っ諦めるな！」

「弦一郎様！？」

「チッ……せつかくのpartyに水を差しやがって！」

こうして、伊達政VS真田弦一郎が始まった。

「弦一郎様……」

「だいじょぶ！」

旦那が負ける訳無いって！」

「ぶ、文之進さん……はい…そうですね！」

「うんうん、元気が戻って良かったでござるよ！」

「はいっ！さあ……私たちも、敵将を倒しましょう！」

「ふう〜しっかりしているでござる……」

「くそっ……歩が悪くなってきたな
引き返すぞ!!」

こうして伊達軍を迎撃したのであった。

華乃は何人か敵将を討ち取り、輝かしい功績を残した。

第玖話：勝利の宴

無事に戦が終わわり、武田軍では宴が行われた。

「華乃よ……良い戦いぶりだった」

「ありがとうございます…幸村様」

幸村様から褒められて華乃は嬉しく思った。
心が温かくなるのを覚える。

「いやあ〜それにしても凄かったでござるよ！
華乃の戦いっぷりときたら…！」

「ふふっ、文之進さん……あまり褒めないでくださいよ」

「いいじゃないのー
本当のことですぞる」

文の褒め言葉に少し照れくささを感じた。
くすぐったくて…でも嫌じゃない感覚。

「……見事だった」

「弦一郎様……」

「これからも華乃に某の背を任せたい……」

「はい……喜んで！」

そして一番嬉しいのは、弦一郎からの言葉だった。

なにより認めてほしいし頼りにされたい。

そんな風に思っている華乃だからこそ……弦一郎の言葉は心を温かく包んでる。

「あ、私がお注ぎします……」

華乃は積極的にお酌をして回った。

色々とまわり、兵たちに言葉をかけた。

劳いの心をもつて……。

「いやはや、華乃殿に注いでもらえるなんて……」

「酒もより美味しく感じますな！」

「ふふっ……皆さん、口がお上手なんですから」

「本当のことだよなー」

「ああ…この度の戦疲れが抜けるようだ」

……なかなか好評だった。

「いや、華乃が居ると士気が高まっていいな！」

「そ、そうですねっ 幸村様!!」

「でもさあゝ旦那的には複雑なんじゃないの？」

「何がだっ？」

「行って良いでござるかあ？」

『某の華乃が盗られまいか…』とかさっ

「なッッ?! そ、そのような事

か、かか、かか考えるわけなかるう!!」

「あらゝ? その割には焦っているようにみえるでござるー」

「う、うるさいぞっ文!!」

「ははっ、一本取られたな! 弦一郎!!」

「……っっ」

こちらは何かと弦一郎が遊ばれていたのであった。

「華乃…私にも注いでもらえるか？」

「あ、はい！」

とくとかとく……。

「華乃は飲まないのか？」

「えと…あまり得意ではないので……」

「そうなのか？」

そんなこと気にせず、今宵は飲んだらどうだ？」

「はい…では少し」

幸村様についてもらって華乃もお酒に口をつける。

「美味しい……」

「華乃も気に入ったようだな？
ほれっ…もう一献」

「はい……」

お酒が少し入るだけで華乃の頬は朱に染まる。

先ほど言ったとおり、酒はあまり強くはないようだ。

しかし、その後も皆に進められて飲んでいった……。

「……ひっく」

「だ、大丈夫か？華乃」

「げんいちろー……さまぁ」

「だいじょおぶですよーあはははっ」

「大丈夫じゃなさげでござる……」

「うーん、ちと飲ませすぎたか……」

「へーきですってばあ……ふあ?!」

……と本人は言っているが、所詮は酔っ払いの言うこと。
平気だと言いかけたのにも関わらず、ふらついていた。

ぼすっ

「ごめんなさあ……弦一郎さまあ……ひっく」

「な、華乃っ?!」

倒れるのを受け止めた弦一郎だったが。
抱きしめる形になってしまったわけで……。
酒とは別に顔を真っ赤に染める弦一郎。

「ん……」

「ね、寝てしまったのかっつ?!」

「げん……いちろ……さまあ……」

「……ッッ」

焦る弦一郎をしりめに華乃は夢へと誘われてしまった。
でも、自分の名前を呼ぶ華乃に少しばかり、ドキッとしてしまった
のは言うまでもない。

第拾話：昨夜の逢瀬

「ん……」

華乃は朝日を受けて目覚めた。

ぼーっとした頭で、何で寢床にいるのだろうかと考えた。しかし、まったく覚えていないと言う始末。

「幸村様にお酒を勧められて飲んで……うーん?。」

いくら思い出そうとしてもぜんぜんだった。こんな記憶もふつとぶまで飲むなんて……。

「変なことしてないと良いんだけど……」

ちよっと心配な華乃だった。

「……とりあえず、着替えようっ」

華乃は支度してから、外へ出た。

その廊下ではったりと弦一郎に出くわす。

「あ、弦一郎様っおはようございます!」

「?!は、華乃かつっ!!おはよう!!!!」

「……どうしたのですか、そんなに驚かれて??」

「いや、なんでもないのだ!

あ、そう!華乃、気分はどうだ??」

「え?ええ、良いですが??」

「そ、それならよかった!!」

華乃は弦一郎のよそよそしさが気になった。

弦一郎はというと、昨日のコトで頭がいっぱいだった。

弦一郎は、華乃が寝てしまったので寢床まで届けた。

その間は……弦一郎には少しばかり刺激が強すぎたわけで……。

「ん……………」

「……………?!」

なんとか、耐え抜き
部屋まで辿り着いたのであった。

「うう…ん、げんいちろう…さま？」

「あ、おっ起きてしまったか……すまん」

「いいよ…」

「まだ、酔っているのか……」

「だいぶ、醒めたよー…あはは」

「まあ、そういう事にしておこう
それでは、某これで……」

……と、弦一郎は出て行くとするのだが。

「待つて……！」

「っ？！華乃」

ぎゅっと掴む。

弦一郎はまたもや吃驚してしまう。

「もうちょっとだけ……だめ？」

「す、少しだけなら……うむ」

向きを変え、華乃の方を向く。
そこには少し着崩れた。

「は、華乃ー！？！？」

「どうしたの？？」

「華乃！！」

「え、うわぁっ？！」

ダンッッ

「げ、げんいちろっ……さまぁ？？」

「……華乃っ」

「……んん」

「……………（ハッ！？某、何を?!）」

弦一郎は勢い余って、華乃を押し倒して口付けをしたのだった！

「……げん、いちろ…さまぁ」

「す、すまぬっつ華乃……！！」

「私…気にしません…だって、嬉しいんです」

「……華乃」

「だって、弦一郎様からして下さるなんて思ってもみなくて…私に遠慮などっ無用ですよ！」

そう言っつて華乃はぎゅっと弦一郎に抱きついたのだった。

まあ、そんなコトが昨晚あつた訳で……。弦一郎的にはかなり気まずいのであつた。それを忘れている華乃は暢気なものだが……。

「昨夜、何か私…弦一郎様にしてしまいましたか？」

「うえ、いやっ…（覚えていないのか）」

「なら良いのですが……」

「そ、そろそろ…朝餉が出来て来るころだな！早くいかねば!!」

「あ、そうですね!!」

とりあえず、切り抜けた弦一郎。
さてはて……二人の行方はどうなるやら……？

第拾話：昨夜の逢瀬（後書き）

大体、前半はこれくらいで終わりです。

後半はもつとらぶらぶな二人が見れる筈！！

こつこ期待なされっっ

第拾巻話・すすめの梵（前書き）

昔の回想に入ります。

第拾壹話：すずめの梵

「はあああああ！！」

「まだまだああああああ！！」

「……ふっ！！」

「やるなあ！！」

「げん、いちろ……さまこそっっ！！！！」

ただいま、稽古の途中。

華乃と弦一郎は互いに交えていた。

「……そろそろ、休憩にするか」

「はい……！ありがとうございます！！」

激しい稽古もひと段落。

華乃はちやくちやくと成長をしていた。
前とは比べられないくらいに。

「上達してきたな、華乃」

「本当ですか!？」

「ああ、自信をもっても良い位だ」

「ありがとうございます」

華乃は驕ったりする性格じゃない事は弦一郎は良く知っている。
褒めれば、もつとという向上心があるからこそ……このように褒めるのだ。

「旦那様華乃様」

「お、文之進か」

「文之進さん！」

空から颯爽と現れる文之進だった。
片手には何かをぶら下げている。

「はい二人への差し入れでございます！」

「「わぁー!!!」」

差し出されたのは、あの甘味屋の団子だった。

「さすが、文之進だ！気が利くな！！」

「ありがとうございますっ」

二人とも目を輝かせて、団子を手を取った。

「（まったく、二人とも子供のようにでござるな）」

なんて心の中でつぶやいている文之進だった。

チュンチュンッ

「雀^{すずめ}か……？」

「珍しいでござるねえ……？」

「こんなに人懐っこいなんて……しかも」

「……あつ」

なんとその雀は、華乃が手を差し出すと……とまったではないか！
しかし、華乃には見覚えがあるようで……。

「……梵^{ぼん}なの？」

チュンチュン♪

雀は答えるように囀^{さえず}る。

「その鳥、知っているでござるか？」

「は、はい……落ちて怪我しているのを助けたので」

「優しいのだな、華乃は……」

「い、いえ……」

雀の梵を手のひらに乗せてうつむいた。

「そういえば、何で”梵”でござるか？
珍しい名前ではござらんか？？」

「ああ…それはですね？」

小さい頃、出会った男の子の名前なんです……」

「そうなのか……」

「旦那あゝ妬けるねえ？」

「文！！」

「ははっ、ごめんねえ」

「まったく……良かったら話してもらえぬか？？」

「は、はい！」

あれは……私が7、8つの頃でした」

華乃は懐かしさを覚えながら話し始めた。

それはまだ、荒者育成所にいた時の事である。

初めて出来た”ともだち”の話である。

当日の華乃は、ただただ教えるに従うのみの、人形にすぎなかった。

そんなある日……。

華乃は、自ら食料調達をするために
山へ訪れていた。

荒者育成場の方針である。

「自分の食料は自分で調達し、決して他の者から貰ったりはしては
いけない」

……と、言う精神の元……こうなっている。
つまりは、己のみを信じ……他人は一切信用してはいけない……と、
言うものだ。

「あ……すずめ??」

まだ雛のすずめが落ちていた。
小さな体で一生懸命、ひんぱん囀っている。
いや……助けを求めているのかもしれない。

でも、今の華乃には関係なかった。
いつもなら、捨て置くところ……。
しかし、何故か……今だけは……可哀想に見えてしかたがなかった。

そつと、加減しながらこすずめを拾い上げる。

手からはすずめの温かいぬくもりを感じ取れた。

ああ……生きているんだな……と。。

ふと、後ろから気配がした。

サツと振り向く。

「あ……あつ……」

そこには、怯えて後ずさりする男^{おのこ}一人。

よほど、華乃が怖いのか？

屍餅までつく始末だ。

それが、華乃にとって少し可笑しかった。

華乃と同じ荒者育成場にいる人にそんな臆病な人はいない。

華乃より小さい子はいっぱいいるけど、恐怖心なんて欠片の一つない子ばかりだ。

まあ、そういう集団にそだてあげるのが荒者育成場なのだが…。

「……弱虫」

「なッ!?!?!?! ぼ、梵は…弱虫なんかじゃない!?!」

……と、言いつつも泣きそうな勢いだ。

「クスクス……」

「あ……お前の笑った…初めて、み、た。」

「え……?」

何故、この男の子はそんな事をいうのだろうか?

そんな疑問が頭をよぎる。

まるで……ずっと、自分を見ていたかのようだ。

「何故……知っている……??!」

「だって……ずーっと……みてた」

「!？」

この頃の華乃は驚いた。

見ていた？

この自分を？？

何故？

何で？？

「だって……梵と同じ……年なのに
……それに女なのに……強いから……」

「……ああ……そうだな」

華乃は思った。
そうだろうな……と。

こんな身なりも立派。
顔立ちも何となく高貴な感じがする。

なにより、気品溢れる香の薫りがする。

自分とは身分違いにもほどがあるのだ……きっと。

「なあ……お前の名前は……？」

「フンッ……誰もが名前があると思うなよ……ッッ?!」

何故だか、イライラした。

そんな感情が自分にあっただなんて。。

「名前…ないのか??」

「番で呼ばれるから支障はない。
私は番号9746351」

「そんな……」

「そついう身分もあるということだ……お坊ちゃん?」

「そうか…」

「そつだ! 梵がお前に名前をつけてやる!」

「え?!」

華乃は吃驚しておもわず声をあげた。
めったに声などあげた事はないのに。
。。

「お前は……今日から……」

「!!」

「——華麗だ!!!」

第拾巻話：すずめの梵（後書き）

だいぶ、時間が空いてすいません（´。°。´）ゞ
頑張っで一氣にこの休みを使って書き上げたいと思ってます。

第拾弐話：少年梵との約束（前書き）

過去回想です^^

第拾弐話：少年梵との約束

「華麗……？」

「そつだ！良い名前だろう？？」

その梵と名乗る少年は最高の笑みで華乃……華麗を見る。

眩し過ぎる綺麗な微笑みに…華麗は見ることも辛かった。

「ど、どうしたんだよ…華麗？？」

「な、何……？」

「泣いてる……」

泣いている…？

このワタシが……？？

「これが……なみだ？」

初めて流した涙は……。

微妙に温かくて。

悲しみを癒してくれる気さえする。

「大丈夫か……？」

「わかんない……」

初めてだから、止め方がわからない。

どうやったら……この……涙は止まるの？？
教えて欲しい……。

「これは……どうやったら、とまるのだ？」

「俺に聞かれても……」

「そう、だよ……な……」

「あ、でも……」

「……ッ?!」

「よく……じゅっじゅっが……」
「うっしてくねる」

梵は華麗を抱きすくめて頭を撫でる。
ゆっくり……。
優しく、愛でるように……。

「温かいんだな……他人の腕かひなとは……」

「そうだろ？」

いつも、梵もこうしてもらってる
そうすると……落ち着いてくる」

「そう……だな……気持ち良い
こんなこと、なかった……」

「華麗は……荒者あしやにいるんだろ？
大丈夫なのか??」

「あ、ああ……」

「よ、よかったら……梵のト」に……!」

「それはできない……」

急に華麗は冷めた声で告げる。

「何でだよ?!」

「そういう掟だ」

「華麗だつてあんなトコロに居たくないだろ?!」

「…あんなトコロでも、私にとっては……」

「…ごめん。」

「……かまわない」

フツと華麗は笑つて見せた。

先ほどとは打って変わり……。

とても綺麗な微笑みだと梵は思った。

「お前は…どこかの武士家だろう?」

「そ、そうだ…けど……?」

「じゃあ…お前が私を雇えばいい……」

「や、とう……?」

「そうだ…お前が大人になり……」

立派な漢おとことなりた時…

お前が将となり、私を駒として雇えば契約となる……」

「つまり……梵がお前を買ったのか？」

「そういう事になるな……」

「梵は…梵はそんな事したくない!!」

「気持ちはわかるが……時期にお前もそうならなければならぬ
……けれど、その今の気持ちは大切にしなければ良い将になれぬ」

「…うん」

「泣くな？男は強くあらねばならない
それが、将なら尚更だ」

「分かった……」

「なら良い……（ ）にっこり」

「……／／／?!」

梵はこの瞬間、華麗に恋に堕ちた。
これが始まり。

「では……このすずめは”梵”と名づけよう」

「え……?？」

「おぬしの本当の名は??」

「ぼ、梵天丸!!」

「そうか…では、”梵天丸”とこのすずめに名づけ

私はこのすずめをお前だと思って大切に大きくなるまで育てよう」

「ぼ、梵だと…思ってた??」

「そう…きっと、私の心柱になるだろう」

「梵…華麗の力になれる??」

「ああ…しかし」

「??」

「もうしばらく、会つのは駄目だ」

「…!？」

「お前の成長の妨げになる……」

「そう言って…その少年とは会わなかったのです」

「そうなのか……」

「な、なんか……切ないでござるな……」

華乃は自分が華麗だったコトを話した。

少年に名づけられ、自分もすずめにその少年の名を与えてた。

「その梵ってすずめがこれなのか？」

「たぶん……そうだと思います」

「へえ……なるほどねえ」

文には、その少年が今の独眼流伊達政だと分かった。

だけど……それは、旦那……弦一郎にとって辛いだろうから言わない。

「あの……この梵を飼ってもいいでしょうか？」

「あ、ああ……かまわぬ」

「よかった……ありがとうございます、弦一郎様」

「／／／／／」

相変わらずに真っ赤な顔をしてしまう弦一郎だった。

「やれやれ……」

そんな旦那と華乃をそつと見守る文だった。

「華麗……かあ……」

「政宗様？」

「いや……ちよいと昔に耽っただけだ」

「しかし今は……」

「わかってる……今は……」

昔、誓った……。

ぜったい……華麗を俺の元へ置いて……

幸せにすると……！！

第拾弐話：少年梵との約束（後書き）

今日はもっと話を進めたいと思います♪
しばし、おまちを…！！

第拾参話：迫る接戦（前書き）

オリジナルストーリーです。

史実ともBASARAとも違いますので
ご了承ください！！

第拾参話：迫る接戦

時は過ぎ、幾年月。

その間は戦国時代とは思えないほど平和だった。

その中で弦一郎と華乃は仲を育んだ。

*その事については短編にて!!

「いよいよ時が来たようだな」

「そのように」

幸村さまと忍仁王は話していた。

「そろそろ、戦の準備をしなければ……
仁王！ 抜かりはないな？？」

「はっ！ 準備は怠り無く……」

「うむ、それなら良い……」

「さて、弦一郎と華乃の實力はどう変化したやら……」

「戦が始るのだな？文之」

「その通りでござる」

「いよいよ……ですね」

「不安か？華乃」

「いえ！次の戦にて、活躍出来ればと！！」

「…なら良い。今の華乃ならば、幸村様のご期待にもそえられるだろっ」

「ありがとうございます。弦一郎さま！」

「……様や敬語は、もうよせと言っただろう？
もうお前は某の……」

「す、すいま……ごめんなさい。癖がなかなか抜けなくて……。でも今だって、弦一郎さ……まを尊敬しているものっ……さまは付けさせて??」

「ま、追々で……か、構わない。さまも……馴れたらはずしてくれ」

「はい！」

「（何時の間にやら以前よりもっと仲良くなったんでござるな……）」

文は何時の間にか仲良くなった二人を見て悲しいような……複雑な気分
分に陥った……。

そう……二人は、この数週間で身分という疎ましい柵しがらみを超えたのだ。
それは、また……別の話で話すことになるでしょう。

軍儀にて。

「明日の戦は、いよいよ私の宿敵……好敵手の上杉軍との戦だ」

「……………?!」「……………」

しんとした空気に亀裂が入るのが分かる。

幸村様の一言にはいつも重みがあるが……。

それに加えて、衝撃的な発表だった。

ついに、あの……常に接線で幕を占めている相手。

上杉軍との戦い。

みな、緊張が走り……手に汗、背中に分らないものが攀じ登ってくるような恐怖に少し似た、感情。

「皆のもの！いつもより気を引き締めて戦に臨むように！」

「……………はいいい！……」「……………」

みな、気合を入れて幸村さまに応えたるように答えた。

「もう、すぐ………上杉と」

「何時にもまして、気合を入れないとでござる!」

「こついつ時にこそ、いつも通りにするのが一番だぞ」

「そういつてえー旦那あ

会いたくて仕方が無いんじゃない?

例のくのいちにw」

「ば、馬鹿なことを申すな!」

「ねー華乃ちゃん！」

「言っんじゃないッ！！」

軍儀が終わって、弦一郎と文は自室へ戻っていた。
もちろん、華乃も……弦一郎の所に来ていた。

「何のことなのでしょう？」

華乃はまったく分からないという風にお茶を淹れていた。

ちよつと……”くのいち”という言葉には引つかかってはいるのだが。

それだけに、聞けない……というのが今の華乃の気持ちだった。

「あ、あの……言いたくなかったら言わなくても良いのだけど」

そういうのが精一杯だった。

なんだか、悲しい気持ちになってきたからだ。

「ち、違っただけ……！」

文之進……！」

「ごめんねー華乃ちゃん

ちよつとイジめたくなってみたりでござる。。」

「それは某が許さん!」

「……はいはい。」

「……で、その人の話を聞いても宜しいのでしょうか?」

「華乃ちゃん…拙者に対しても敬語つかわなくていいんでござるよ……」

弦一郎との差に少しのショックを覚える。

「文が言ったのは……上杉軍の忍を率いているくのいちのことだ」

「率いている…という事は……」

「一番上の位というか、忍頭しのがしらと言った所だ」

「彼女は、玄人よりも凄いでござる!」

「玄人より……」

「拙者のように、忍の里から出た輩じゃないでござるよ」

「では、何処で……まさか?!」

「そうだな」

「華乃と同じ出身だと思われる」

「同じ……」

「その忍にも、”荒くれ”と名乗っている事から
その年にでた、優秀者だろう……」

「そうだったでござる

……華乃ちゃん、ごめんねえ」

「い、いえ……！平気です。。
ただ……」

「何か気になることでもござるか？」

「言ってみろ、華乃」

「はい……」

「……私と同じだと思うと……切なくて」

「「……」」

華乃は、荒者育成所で育ったので良く分かる。

あそこが……どれだけ、辛くて大変で。

自分が自分でなくなる。

我を見失う者が多い。

華乃は、運良く……梵天丸。

今の伊達政に出会い。

弦一郎に助けられ……。

ようやく、自分という存在を認められた。

「荒くれと名が付くもの……」

一層、気をつけなければなりません」

「そう……だな……」

「で、ござるな……」

三人は、気を引き締めた。

明日の戦で。

毘沙門天のご加護があると言われる神童の上杉堅信。

その側近である、策士の直井鉦継。

そして……。

華乃と同郷……出身が同じくのいち。

気を抜いたら……きっと、とんでもない事になるであらう。

幸村様の寝室

「越後は、荒者の発祥地……」

恐らくかなりの荒者たちが居るでしょうね」

「だろうな……」

しかし、こちらにも荒者がいる

しかも別嬪のな！あつははは！！」

「ゆ、幸村様……」

寝室で仁王と話している幸村様であったが。
そんな間の抜けた言葉に、呆れる仁王。

「（ま、こんな所が幸村さまの良い所だけど……な）」

密かに仁王は思ったのであった。

第拾参話：迫る接戦（後書き）

すいません。

UPに時間がかかって……

第拾四話：華乃の言葉（前書き）

これは

戦国BASARAをベースに書いた
オリジナル小説です。

なので、史上とも関係ありません。

ご了承ください。

第拾四話：華乃の言葉

いよいよ、戦が始まろうとしている。
兵士達の士気も上々。

熱気が……凄まじい事になっていた。

——陣地内

「準備は、できているかな？」

パチパチと薪の炎が燃え上がる。
まるで、今から始まる戦を著しているかのようにだった……。

「勿論でございます、幸村様！」

「私の方も、万全でございます！」

二人の男女はそう言い切った。
やる気に満ちている顔をしていた。

「忍部隊も準備完了でございます」

「万事抜かりなく……」

忍達の準備も整ったようだ。

「じゃあ、華乃？」

「は、はいっ何でしょう、幸村様？」

行き成り声を掛けられると思っていなく、慌てて答える華乃。
その様子が可愛らしく、本当にこの戦^ばに合わないと思つた。
た。

「この戦は、死者が沢山でるかもしれぬ
……今までの戦とは、規模も違うからな」

「そうですね……」

「だから、途中……仲間を失い
混乱する者や逃げ出したいと思う兵もいるだろう」

「……はい」

幸村様の言葉をひとつひとつ、自分の中に浸透させる。
これは、他の者に言っている事なのだが
まったく自分に当てはまらないともかぎらない……華乃はそう思っ
た。

自分も、逃げ出したくなるかもしれない……途方に暮れてしまうかもしれない。

だからこそ！……今、自分を律しておかなければならない。
……この、大切な戦局だからこそ！！

「……戦前に、是非とも

兵達に向けて、何か申してはくれまいか？」

「ええ！？」

まさか、こんな大事な所を

自分みたいな新参者がやっていいのだろうか。

ここは、弦一郎様などの言葉のほうが、いいのでは？
そう思わずにはいらなかった。

「ふふつ……弦一郎の方が適任だとみるか？華乃は……」

「え、あ、あ……えと……はい」

「素直でよろしい……が

この大事な戦局だからこそ華乃のような者が良いのだ」

「……本当によろしいのですか？

私などで……」

「お前にしか、出来ないと思っている

……それにこんな戦地だ。

女子の言葉の方が、士気もあがるだろう?」

「は、ははっ……そうですね」

「……それを抜きにしても

華乃は、兵達に好かれている上に
信頼もされている」

「そ、そうでしょうか……」

華乃にすれば、これほどの褒め言葉はない。
舞い上がってしまいそうになる、気持ちを必死に抑える。

「だから、な?」

「はい!」

こうして、上杉との決戦の前。

華乃は兵たちに、言葉を送ることになった。

……もしかしたら、命を落とすかもしれないことも……。

「楽しみでござるね、華乃のお言葉」

「あまり、おちよくった口調で申すではない」

「そんなことないでござる！」

……そんな事言つて……一番楽しみにしてたくせにっ」

「う、るさいっ

黙って聞けっ……！」

「もちろん、そのつもりでござるよ」

いよいよ、決戦前。

華乃は、皆の前に立つ。

……すると、顔つきが一瞬で変わる。

この時の華乃の目は、眼力で人を殺せるかのように鋭かった。兵たちもそれに気づき、気を引き締める。

「私個人の言葉ではあるが、聞いてくれ」

声にも鋭さが増す。

普段では想像出来ないほどだ。

凛々しく低い声だ。

「今から戦う相手は……あの上杉堅信だ！
参謀には直井鉦継もいて

……私の同胞であつた、忍軍もいるであろうっ」

一度区切って、息を吸い込み……気を集中させる。

「見た目に騙されて遅れを取るな！

一氣に攻め立てろ！！

……さすれば、堅信につく、毘沙門天^{びしゃもんてん}でさえ
こちらに味方してくれるだろう」

その言い様は、美しくもあり凛々しく気高かった。
だれもが華乃に見惚れた。

女としてではなく……一人の武士として。

「決して脅えるではない！

最後まで自分の命が尽き果てるまで、進め！！

勝利をあげろ！！！！

途中放棄するものは、私が切り捨てる」

そう言われて、誰も引かなかった。

これは華乃を心から信頼し、仲間だと認めている証拠だった。

「出陣の準備じゃああ……！！」

「「「「「おおおおおおお！！！！！！！！！」」」」」

陣地の周りに、大きな共鳴を響かせた。
鳥は驚き、一斉に飛び立つ。

「おお……あちらさんは、準備できたみたいだねえ」

あちら……武田軍の雄叫びが聞こえたのか
いつものように、のんびり構えている堅信。

「殿、そのようにのんびりしていて良いのですか！？」

そんな態度に痺れを切らせて、側近である直井がつっこんだ。

「いいんだよ……ゆっくりで

こちらは、用意は完了しているのдар？」

「ま、まあそうですが……

殿は、出陣前の食も一品残されましたので

小姓は心配なのです」

「ああ、あれ？

だって願なんて私には関係ない……

好きなものを好きに食べるのが、一番ではないか？」

「そうでしたら、小姓も文句は言いませんが……」

越後の龍と謳われる^{うえすぎけんしん}上杉堅信[〃]

自分の配分を守り、ゆっくりしている。

この戦国には相応しくない人でもある。

だから、直井は心配でならなかった。

しかし、堅信は……幸村という好敵手を得て
戦う気を起こしたという。

とても、気まぐれ屋でもあった。

「さあ……幸村よ
どうでてくるか、私は今から楽しみだ……」

そう誰にいうでもなく、呟く。

この姿は、絶世とも言われている。

越後の地に生まれた、美男子、でも有名な話だ。

「……春日」

「はい、ここに」

その名を呼ぶと、どこからか

これもまた美しい美女が現れる。

彼女こそが、荒者の出身である……くのいちだ。

「私は、幸村と一対一で

誰にも邪魔されずに、戦いを楽しみたいと思っているよ」

「もちろん、誰にも……堅信様の邪魔はさせません」

「良い子だ

……春日、此方へ来なさい」

「はい」

春日が近くになると、愛でるように頭を撫でる。
……その時ばかりだけ、少女の顔に戻る。
これが、本当の彼女なのだろう。

「け、堅信様……」

「私の可愛い懐刀よ……頼むよ?」

「はい!」

嬉しかったのだろうか、さっと素早く行動に移す。

「さあて、どうなるか……な?」

第拾四話：華乃の言葉（後書き）

お読みくださってありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5041g/>

戦場に華が舞い散るとき

2010年10月9日11時42分発行